

吉澤義則編

未刊國文古註釋大系

第七卷

清
文
堂

未刊国文古註釈大系（全十八卷）第七卷

昭和十三年六月二十日 初版発行
昭和四十三年十月五日 複刻版発行

編纂者 吉澤義則

発行者 前田勝雄

製版者 京都市下京区柳馬場四条通下
光綾写真製版株式会社

能登英夫

印刷者 京都市南区東九条南石田町一
朝陽堂印刷株式会社

高橋清二

製本者 大阪市天王寺区勝山通一ノ一〇
倉橋製本株式会社

倉橋重男

発行所

大坂市南区二ツ井戸町十五
清文堂出版株式会社

振替 大坂六二三八
電話 四六二六五（代）
郵便番号 五四二

未刊國文古註釋大系

第七冊 目次

拾遺愚草抄出聞書 二卷一冊 一

拾遺愚草抄書 二冊 二

月清集攷 岡本保孝著 一冊 一五

新撰六帖考 岡本保孝著 一冊 一九

長秋詠藻備考 岡本保孝著 一冊 一九

嘉喜門院御歌卷證註 谷森善臣著 一冊 二七

百首要解 岡本保孝著 一冊 二七

堀河百首校註 岡本保孝著 四冊 三五

拾遺愚草抄出聞書

二卷一冊

拾遺愚草抄出聞書開題

本書は、宮内省圖書寮の尊藏本であつて、上下二卷を合して一冊になつてゐる。

本書は、藤原定家の歌集である拾遺愚草及び同員外の歌の抜抄註釋である。本大系本冊所收の拾遺愚草抄書とは別の歌を多く註してゐる。

本書は、奥に「年七月十一日寫之畢 宗巳」とあるのみで、其他は蟲損の爲に不分明であるのは遺憾である。従つて著者並に著作年代を知り得ない。

本書と同題の一冊は故久保田米齋畫伯が所藏してゐたやうである（久保田米齋蒐藏古書展觀目錄）。

本書と相似の書名に、東常縁の拾遺愚草抄書聞書一卷があつて、本書の初の方と同一のものゝやうである。同書に就いては大日本歌書綜覽に

定家の歌集の中、初學百首、花月百首、十題百首、名所百首より五十八首を抜きて註す。文明十四年の奥附あり。常縁の説を宗祇の聞書せるもの、世に行はる。

と見え、國書解題にも、

藤原定家の拾遺愚草の抄書聞書なり。文祿四年乙未（一二五五）玄旨法印寫本の奥書あり。

と記されてゐる。草體の「書」と「出」とは相似てゐるので、混同したものとのおもはれる。本書或は東常縁の著作ではなからうか。常縁には、別に拾遺愚草を註した「東野州拾唾」一卷がある。

拾遺愚草抄出聞書 上

初學百首之内

春雨のしみ／＼ふれは稻庭にみたるゝ青柳の糸

此歌ことなる儀なしいな庭は稻葉のほなみをいふと云々
又わら庭ともしくと云ふ枕ことはのやうなれと柳にいひ
ならはせり柳のみたれこのむしろに似たるへし

あらし吹岸の柳の稻庭ともよめりしみ／＼ふるとは世俗
にしみ／＼とふるなといへるおなし事也

秋の夜の鏡にみゆる月影はむかしの空をうつすなりけり月
にむかひてむかしをおもふ心の残なければさながら昔を
うつす鏡そとおもふこゝろにや

咲まさる位の山の菊の花こきむらさきの色そうつろふ

此位山はあなち名所にはあらすたゝ叙位せられたる儀
也紫は三位袍也

もろともにゐなのさゝ原道絶てたゝ吹風の音にきけとや
たかひに別たる心にや歌のすかたいふはかりなきにや

戀わたるさのゝ舟橋かけ絶て人やりならぬねをのみそなく
東路のさのゝ舟橋とりはなしといへる本歌の餘情なるへ
し

法師品
なかれきてちかつく水にしるき哉先ひらくへきむねの蓮

は

ゼンケンシユドダイケツチャウチコンス
漸見濕土泥決定知近水の心也法のうるほひに此胸

の蓮はひらくへきにや

壽量品

浮世にはうれへの雲のしけゝれは人の心に月そかくるゝ

常在靈山の心也

神力品

ためける佛の道をしるへにて今は浮世にまとはすもかな
決定無有疑とて眞實如來の形想をあらはし給品也

藥玉品

身にしめて書を書く法の花の色の深さ浅さはしる人もなし

書寫の功德をとける品也

勸發品

聞はつる花の御法の末にこそ定め置ける身とも知ぬれ

最結句の品也此品にて衆生成佛のことはりをさためられける心にや

たつたひに心ほそしやもしほ焼煙は旅の庵りならねと

旅の泊などにてあまの煙をなかめておもへる心にや先旅たつ朝を心ほそきことの限にしてそれならね共此煙はさひしく心ほそきと也 による物ならなくにとよめる面影もあるにや

旅の空をはすて山の月影よすみなれてたになくさみやせし

此山里にすめる人に對していへるにや

よ 君か世は嶺に朝日のさしなから照すひかりのかすをかそへ

けふことの朝日のことくに絶せぬ御代そと也

三笠山いかに尋んしら雪のふりにしあとはたえはてにけり

藤氏のすゑになれる述懐にや如此絶たる道をはいかに尋しらむの心なるへし

二見浦百首の内 圓位上人勤を云々

花の散ゆく衛をたにも隔つゝかすみの外に過る春かな

落花の行衛をたにみて暮行春をも尋んとおもへはそれをさへ隔つるかすみそと恨たる心にや

忘つるむかしをみつる夢を又猶おとろかす萩の上風

何となく自然に戀しきむかしを夢にみてさなから昔に歸りたる心をそのかひもなく又もとの心に吹かへしたる風をうらめしくおもふにや有心なる歌とそ能々可思萬事頗懷忘猶牽古人夢と云心もあるにや

誰もしれ浮世の色をあちきなく秋の野原の花のみの露

秋の野の花の露は浮世の色そとなかつてはかなしきこと

とはおもへとも又心にとまるをあちきなくと云也あちきなきはせん方もなき心也たゞ着執をいさめたるにや

秋のきて風のみたれし空をたに間人はなき宿の夕暮

風のみたれしは初秋のさま也行末のさひしさをかねておもへり

詠しとおもひし物を淺茅生に風吹宿の秋の夜の月

月を詠れはこの宿のかなしき數まさるまゝに詠しとおもひしをといひのこしたる也秋風の哀とつらさをいひたてたる歌にや

秋のみそ更行月に詠して同じ浮世はおもひしれとも

同じ浮世とは秋のうきと世の憂とをいへり静なる月にむかひて浮世をは忘たる也秋のうさはさら／＼月にそふちするを秋のみそと云にや五文字にて句をきりて可心得歟月は浮世のほかよりやゆくの餘情なるへし

在明のひかりのみかは秋の夜の月は此世になをのこりけりあり明はつれなく残る物也秋の月のみむかしなからなる光を感じて残月に對していへる也世上のおとろへをおもふ心あるへし

そこはかと心にそめぬ下草もかるれはよはる虫のこゑ／＼眼前の萩薄をは人毎にめつる物也名も知ぬ草花なとは心もそめぬ物也それも虫のねのよはるを聞て霜枯の時分にあはれをかけたる心にや

うつろはんまかきの菊は咲初て先色かはる淺茅原かな

菊はうつろふ草の主也

晴くもる同しなかめの契たに時雨にたゆる遠の里人

此歌は月を下にこめてよめる也戀しきはおなし心にあらすとも今夜の月を君見さらめやといひかへしさやかにも

みるへき月をわれはたゝ泪にくもる折そおほかる二首の餘情にや月の時分はくもると見はるゝとなかめかはしてもなくさめしをひたすら時雨に絶たる也遠方の朋友なとに對しておもふ心なるへし

おしみつゝ暮ぬる年をかねてより今幾度としる世なりせはおしみつゝとは年々歳々の暮也今いくとせにておしみはてんの心也しる世なりせはといひのこしたる心は後世菩提につけ色々覺悟あるへきことにや

戀はよし心づからもなけく也こは誰そへし面影そさは

上句はきこえたり面影はさりとてそなたのにてこそあれとはかなくかこちたる心にや

みるもうしおもふもくるし數ならてなと古を忍ひそめけん述懐みるもうしとは此興なる世上の見聞に付て物のみかなしきまゝに昔を忍ぶ也然とも數ならぬ身はむかしとても同事也されは何かは忍初し事そと思返したるこゝろにや

人しれぬ心のうちのかねこともかはれはかはるこの世也けり

無常人毎に心のうちのかねことは有へけれども生を隔つ
れはみないたつらことになる心をかはれはかはるといへ
るにや猶可思

いかならんみわの山もと年ふりて過行秋の暮かたの空
神祇いかならむ身とつゝきたる言也いかに尋ん年ふとも
とよめる面影也過行はゆく末の事也いよ／＼わか身をい
かならんと歎也過は杉をよせたり

鳴のたつ秋の山田のかり枕たかすることそ心ならては

田家此題の秋の感なるへし何之風情も侍らぬ所なれとも
我心からあはれをもよほしたる儀とそ

明ぬとも猶面影は立田山戀しかるへき夜はの空かな

山上句は聞えたり戀しかるへきとは此山に旅ねなとして
行末もわすらるましきの心にや夜半を請したる山なれば
明ぬともいひ戀しかるへきといへり

なれきにし空の光の戀しさに獨しほるゝ菊の上の露

陵園妾陵園は天子のみさゝき也妾はこゝをもる女也空の
光は天子の御事を申也宮つかへに馴し妾の心也菊はこの
園にうへたる花也雅賦にあり

皇后宮大輔百首之内文治三年春詠姦之

あたらしや賤の鹽手をかりそめに隔つばかりの八重の卯花
しつか鹽手のへたてはかりにさけるかと卯花をいたはり
たるみるめ也もてはやす人なきさまにや

御稜川かはらぬあさの末をさへみな一かたに風そなひかす
みそき川河原のあさとある本もあり又一本からぬ淺茅と
もあり心はかたへ涼しき風や吹らんの面影なるへし一か
たは人形によせたりあさにてもあさちにてても同御稜の具
也

秋の色をしらせそむとや三か月の光をみかく萩の下露

みか月のそれともわかぬ影を萩の露のもてはやしたる様
にや此月花のゆくゑを察したる心也

待おしむ隙こそなけれ秋風の雲吹はらふ夜半の月影

雲間をまちおしむ心也

山のはに名殘とゝめぬ影よりも人たのめなるあり明の月

中々入方の月はおしむにもせんかたなし在明はありとは
みえて心つくしなれば人たのめなると也

色々に紅葉をそむる衣手も秋の暮行つまとみゆらん

紅葉を染むるとは野山のもみちする時分袖も秋の感情にもよほされたる色なるへし然はこの色も秋をおしむ妻にてありけるとや

降敷し本葉の庭にいつなれて霰待とる音をつくらん

昨日まで梢にみつるをいつしか落葉となりて馴かほに霰の音をしらする也

遠方やはるけき道に雪つもり待夜かさなる宇治の橋姫

此遠方はいづくにても橋姫の待らんかた也この頃の雪を思やる心にやはし姫の物語にいへる分は宇治にある男女すめり此女つはりをして七浦の海藻をくはんといひしを男尋てゆきて高鹽にとられてむなしくなりたるを女かなしみて泣浦にいたりて跡をたにみむとおもふに夕波のことなき方より男のこゑにてさむしろに衣かたしきの歌を詠吟したると也又住吉の明神のかよひ給ふともいへり

あらはれんその錦木はさもあらはあれ君かためてふ名をしたらすは

あらはれんはわか名也

猶そうきこの世に聞しことのはゝかはるも本の契とおもへは

逢不言戀の心也此世にて契ことのかはるはむかしの故也然而來世も又同じ行衛なるへければ猶そうきといへるにや

清見かた關守波にことゝはん我より過る思ひ有やと

關守浪とは清見かたはあら磯にてうちよする波に旅人のとをりかぬる也さていへるにや波の間をみて過行所なれはその縁のことはよせてわか戀の人に超過したる心を又やあることとはんと也

涙やは紅葉葉なかす立田川たきるとすればかはる色かなこのやはのやもしはをき字也たゝ涙はと云五文字也泪のたきる時は紅の袖になる故にもみちの波にせかるゝやうにおもひよせてよめるにやなを可思

うしみつと聞たにはてし待えずは只時の間の命ともかな人を待心の堪かたきまゝに時の間に消ぬへき命も哉とおもへり然はうしみつと云ふ計の契をも中々きかしと也戀わひぬ花ちる嶺に宿からんかさねし袖やさてもまかふと

旅戀君かたもとに落花のうつくしきをおもひよせたり

草枕ちる紅葉葉のひまも哉馴こしかたをよそにたにみん

同題紅葉のみたれに我おもふかたをみぬ心にや

忘はや松風さむき波の上にけふ忍へともちきらぬ物を

同題は心は旅泊のいたりてかなしき時子をおもふ心にや

かゝる所にておもひ出るとは人もしらしもとより契もを

かねは忘はやとおもひかへすにや

閑居百首の内

色みえて春にうつろふ心かなやみはあやなき梅のにほひに

心の色はみえぬ物なから春にうつろふと也やみはあやな

きは本歌の心也闇になをあくかるゝさまにや心の色も花

のにほひもみえぬ也匂ひにうこく心也あやなしはかひな

きことをあちきなきなと云詞也

年ふれは心の春はよそなから詠なれぬる明ほのゝ空

述懐心の春は花をもたせたり大かた聞えたり

月影の哀をつくす春の夜にのこりおほくもかすむ空かな

此哀はおほろ月夜にしく物もなしとよめる風景なり残り

おほきとは明行空をおしむ心をいひ残したる也

物ことに色はかはらておしまるゝ春は心のわかれ也けり

うつろひゆくをかきりとおもへはの本歌也春のけしきは

秋のやうにうつろひかはる事はなけれとたゝ心の別也

五月やみ空やかほる年をへて軒のあやめの風のまきれに

年々歳々空のかほるそとさ月の時分思ひしは軒のあやめ

にて有けるよとおもひえたる心にや

夜をかさね身にしみまさる風哉松の梢に秋や過らん

此秋や過らんは毎夜松風を聞ておもへるにや

くまなさは待こしことそ秋の夜の月より後のなくさめも哉

待こしは兼々おもふ心也月より後は入て後のこと也

行秋の時雨もはてぬ夕ま暮何にわくへきかたみなるらん

時雨を秋のかたみそとおもへは定なきまゝに何をか秋の

形見そと分別せんと也惣別時雨のさまをもてあつかふ心

なるへし

山ふかき楨の葉しのく雪をみてしはしはすまん人とはす共

雪に人を待あまりてなくさめたる心也

ふる袖の山あひの色に年つみて身もしほれぬる心ちこそす

れ

此歌は臨時の祭をよめり四位五位の殿上人勅使にたつ也
述懷の歌也官位のあさきをうらむる心にや

忘れぬ人をいつこと尋ても馴しかことのある世なりせば
忘ぬ人をは尋えたりとも前々まめやかなる契約なとあら
はこそかひもあらめといひのこしたる也

むれてこし同し渚の友鶴にわか身ひとつのなとをくるらん
述懷 雪月花の友にをくれて歎さまにや

こす波の残りをひろふ濱の名のとをとて後もみとせ過しつ
こす波は官位を人々こされたる心也残をひろふは侍從の
唐名拾遺の字也侍從にて十三年過たるこゝろ也とをりて
と云本もあり是も十の字をかさねたり

影清き雲井の月をながめつゝ扱もへぬへきこの世はかりを
心は月花をのみ見てをくるへき世を俗塵にましはるよと
おもふ心にや此世はかりをといひのこしたる所に後世の
心あるへしこの世をいたつらにすくすはかりはせめてそ
と也

是も又おもふにたかふ心かなすてすは憂をなけくへきかは
すてすは憂をととて世俗にましはるうへは憂ことを

もなけかしとおもへは又歎くゆへにおもふにたかふそと
也

跡絶てそなたとたのむ道もなし南の岸のしるへならては
跡絶てとは藤氏の跡也淡海公興福寺たてられし時南圓
堂桓虫食の歌をたのもしくおもふより外のたのみなしと
にやふたら具の南の岸に堂たてゝ今そさかへん北の藤な
み

しかはかりかたき御法の末にあひて哀此世と先歎かな
しかはかりとはかくはかりと云心也哀此世とは世を感じ
たる也

さかのほる波のいくへにしほれけん天のかはらの秋のはつ
風

長白房天川にいたりて二星をみたる事也さかのほるは逆
上水也

草枯の野原の駒もうらふれてしらぬさかひの長月の空
遠堺におもむきたる心也長月は物かなしき時分也

つてに聞契もかなしあひ思ふ月末の鶯の夜な／＼のこゑ
鶯の古事に昔美人のふたり相思ひたる執心残て此鳥にな

りたるといひ傳たり其昔を傳へ聞て哀をかけたる心にや
無動寺法印百首和答之内

去年もこれ春の匂ひに成にけり梅咲宿のあけくれの空

去年もこれとは毎年如此と云心也春の匂ひになりにけり
とは春の感情ふかき時節也明闇は梅か香に心のとまる比
也明はつれは萬事に心のうつりて感するけあさくなる也
いかゝせん雲るの櫻なれ／＼て憂身をさそと思ひはつとも
浮身とは思ひはつれともこの櫻になれたる春をはわすれ
かたくおもふ述懐にや

きなれたる駒にまかせん苗代の水に山路はひきかへてけり
老馬知道と云語より出たり苗代の時分は山路もおもかは
りせる心にや

東屋のひさしうらめし子規待宵過るむら雨の聲

あつまやとは柱四本にて作たる家也夜をかさねてまつに
つれなきまゝに村雨の音するひさしさへうらみたるさま
にや俊恵法師のねやのひまさへとよめる心にや
春立し年もさ月のけふきぬとくもらぬ空にあやめふく也

心は光陰のうつり也くもらぬ空とはまかはぬ空そと也五

月の今日をいへりいつの間に五月のきぬるそとおもへは
あやめをふくに心のうたかひを晴たる心にや

人はすむとはかりみゆる蚊遣火の煙をたのむ遠の柴牆

人はあるかなきかの宿なるへし煙をしるへにことゝはん
と也旅の心にや

山陰の岩ねの清水立よれば心のほとを人やくむらん

我納涼の心を推量すへきとや

あちきなし浮世は同じ世中そ秋はかきりに夜はふけぬとも
九月盡の歌也浮世にとは萬事限ある物なればと今夜の名
残をおもひなくさめたり猶あちきなしとせんかたもなき
さまをいひたてたるにや又秋ならずとも浮世は同世中そ
と也

降初し空は雪けに成はてぬ人をもまたし冬の川里

ふりそめしより晴ぬ心也けふも又雪けになりてふり／＼
する也初雪の頃は人もまたれし心也

淡路島千鳥とわたるこゑことにいふかひもなく物そかなし
き

千鳥を感じたる心也いかはかりの哀こられるこゑそと物

かなしく聞心よりおもひかへせとも又いふかひもなく成
也海邊の旅ねなどに聞えたる心にや法をはなれたる幽玄
なる歌なるべし

おもひねの夢にもいたくなれぬれは忍びもあへず物そかな
しき

忍戀の心にやうつゝに人になるれは忍かたき心をもたせ
たる也夢路には忍ふましけれともそれにもなるれはと也
なとり川いかにせんともまたしらす思へは人をうらみつる
かな

本歌の心は既にあひみて後悔する也此の歌の心はあらは
れはいかにせんとまては分別もなくさても遠慮もなく人
をうしつらしとらみける事よと驚たる也あはゝ此名の
立ぬへき用心也

身をしれはうらみしとおもふ世中をありふるまゝの心よは
さよ

世中はふたりの間を云也有ふるまゝに何となくうらむる
そと也世のありさまを人はしらねはの心もあり
うかりける物おもふ此の曉は人をもとはんこの世ならても

雜歌也曉とりあつめて物おもふ心にかゝるたくひなる人
をは此世の外までもことゝはまほしきの心にや里をはか
れすの面影なるへし

吳竹のわか友はみなならへとも獨ことなるのはやし哉
竹によせて思ひをのふるの心也我友の官位は曆々なれと
もと也はのはやしは羽林也中將の唐名いまた中將にもな
らぬ事にや

おもふ人あらはいそかん舟出してむしあけのせとは波あら
くとも

別なる儀なし寄名所戀也さ衣の心も有歟

ぬは玉の夢はうつゝにまさりけり此世にさむる枕かはらて
此世にさむるとは舊枕也この世の夢に覺はてし人はさら
て又みる事もなきを夢は枕もかはらてみゆれはうつゝに
まさるといへるにや

重和答百首之内同題

心にもあらぬ別の名残かは消てもおしき春の雪哉
世上の別は心ともなき物也さやうのなこりかは消にし跡
まておしきはと云心にや殘雪執心淺からぬ理也

蚊遣火の煙のあとや草枕立なん野へのかたみなるへき

此かやり火は旅人なと何となく焼たる心にやこの跡を又
爰にきてみん人のたか旅ねしつる名残そなと哀をかけん
かたみなるへきかと也

いとひつる衣手かろし氷室山夕の後の木々の下風

此いとひつるとはあつき衣をいへりいつしかこの納涼に
のろく成たると也夕の後とは暮はてたるさまにや

しのゝめにわかれし袖の露の色をよしなくみする女郎花哉

此花は女によせたりつねのしのゝめの別は物ふかくかく
れよしはめるをこの花の露の色はさやうにしのふけしき
もなきさまをかくいひたてられたるにや

をき初ておしみし菊の色を又かへすもつらき冬の霜哉

霜のをけは菊のうつろふをおしみつる也うつろひはてゝ
後をく霜をは花かとみて興したるを又霜の消てもとの色
に返したるをつらきといへるにや

よをへてはみるもはかなきあしろ木にこしの御空のかせを
まつらん

よをへては夜をかさねて也みるもはかなきは世間のみる

め也こしの御空の風は北風也ことなる儀なしはけしき時
分まで守侘たるさま也あなから風を待とはみるへからす
只時節也

後の世をかけてや戀んゆふたすきそれともわかぬ風のまき
れに

風のまきれとは木綿をひら／＼と吹なひかしたるやうに
ほのかにみし人を後世まで戀んははかなきことなるへし
深重なる物也

おもふとは君に隔てゝ小夜衣なれぬ歎に年そかさなる

忍戀の心也さ夜衣なれぬ詞のえんばかり也

何とこのみるともわかぬまほろしよよそのなけきのちへま
さるらん

此歌はほのかにてみたる心也まほろしのやうにみし人を
よそにおもふ也なけきは木也ちへは枝也よそにおもひし
よりはほのかにみてまさる儀にや

おしまれぬ憂にたえたる身ならずは哀過にしむかしかり
を

雑歌也此五文字は惣別人におしまれぬ身そと云心也うき

ことに心みしかくはとくむかし語になるへきと也大意は
おしまれぬ身なりとも世を早世はしのふ人も有へき物を
と也

花月百首之内

あくかれし月と雪との色とめて木末にのほる春の山風

雪にあくかれ月にめてゝありし事共を此花に二なからの
面影をのこしてみるよと花をふかく興したる也又王子猷
乃心とも云々

明はてす夜のまの花にことゝへは山のはしろく雲そたな引
明はてすはたゝ夜ふかく花を尋きたればやう／＼ほのほ
のと明たるさま也景氣不可説云々

玉ほこの便にみつる櫻花又はいつれの春かあふへき

此行手に花をみて言語道斷と感したる心よりかゝる興を
は又もとおもへる心あれはいつれの春かといへり便にみ
えしの本歌をとりかへたる物也おもひもかけぬ花をみた
る且的の心面白物をや

山櫻までともいはし散ぬとて思ひますへき花しなけれは
本歌の心をよくおもふへし詞に問答したる歌也よし／＼

までともいはしと也散たれはとて櫻の外におもひうつる
へき花しなけれは散とも心は櫻にあるへきのおもむきに
や

さえのほる月の光にことそひて秋の色なるほしあひの空
此さえのほるは消のほると同詞也明白なる月の光に今夜
の星もあひに合て秋の曆然なると也秋の色は秋の景色な
り

かそふれは秋きて後の月の色をおほめかしくもしほる袖哉
此五文字は秋はいつ／＼とかそへし也秋いたりて後袖の
しほるゝを何故そとおほめくをおもひかへしてことほり
にて有けるよ月の色も袖をしほるへき時分そと思也
月ゆへにさゝすはしはしことゝはん柴のあみ戸よ我またす
とも

此しはの戸は月ゆへにさゝぬ也さてはわれを待へきには
あらねとも月の興に乗してこととはんと也

山ふかみ岩きりとをす谷川を光にせける秋の夜の月

岩きるは水のはやき瀬也河波全體月の色なれば光にせけ
ると也光をたゝへたるやう也